

第5回 ソサエティーとコミュニティー

●コミュニティーの語義は「全員の同質性に立脚する集団」

第1回で述べた通り、今日的な意味での「社会 (society/société)」は、個人を構成単位とする集団であり、赤の他人同士が連帯する場である。ただし、社会という語がそのように定義されるようになったのは、それほど古いことではない。交通や通信の手段が限られていた時代、主たる人間関係は、赤の他人との接触ではなく、互いに固有名詞を知る者たちの中で成立していた。要するに、個人を単位とする社会という場は、近代化の過程で初めて表舞台に現れて来たということなのである。もちろん、近代以前には「社会」型の人間関係が存在しなかったというのではない。だが、それが前面に現れるのは、やはり近代化の動きが始まってからのことなのである。

洋の東西を問わず、圧倒的多数の人類は、長い間、今日的な意味での「ソサエティー (社会)」の一員であるよりも、「コミュニティー (共同体)」に帰属する存在であった。ところが、この「community (英)」という語を英和辞典で引くと、「共同体」という訳語の他に、「社会」という和訳も載っている。これでは、「コミュニティー (共同体)」と「社会 (ソサエティー)」との違いが、非常に分かりにくい。英語の「ソサエティー」が「社会」と翻訳され、その「社会」が「community」の和訳語に含まれるのならば、日本語を介した場合、「コミュニティー」と「ソサエティー」が同義語になってしまう。そこで、日本語における「コミュニティー」の意味を確認するために、『広辞苑 [第六版]』を参照すると、次のように記されている。

- ①一定地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体。②アメリカの社会学者マキヴァー (Robert M. MacIver 1882-1970) の設定した社会集団の類型。個人を全面的に吸収する社会集団。家族・村落など。③群集2に同じ。

最後の「③群集2に同じ」というのは、生態学用語としてのコミュニティーなので、ここで敢えて取り扱う必要ないだろう。その上で①と②を読めば、西洋語の「community (英)」や「communauté (仏)」の大枠が、ほぼ正確に反

映されていることが見て取れる。すわなち、「コミュニティー」とは、広い意味で何らかの仲間集団だということなのである。ただし、コミュニティーを「社会集団の類型」とし、「個人を全面的に吸収する社会集団」と定義することには、少しばかり問題がある。なぜなら、コミュニティーを定義するために、個人と社会という図式が用いられているからである。これでは、コミュニティーと「社会（ソサエティー）」との区別が不明確だし、ある集団に「全面的に吸収された」者と、固有の自我を担う個人との区別も曖昧になってしまうだろう。

それでも、『広辞苑』が示す「コミュニティー」の語義は、各人の個別性や差異よりも、全員の同質性に立脚する集団だという基本定義から大きく外れるものではない。実際、家族や村落などは、赤の他人の集団ではなく、何らかの「共属感情を持つ人々」の「共同体」だと言えるだろう。この点において、「コミュニティー（共同体）」と「ソサエティー（社会）」は、明確に区別される。逆に言えば、コミュニティーの場合、その一員になれる者となれない者が存在するということなのである。例えば、アメリカには、多くの人種コミュニティーや宗教コミュニティーが存在する。当然のことながら、白人は黒人コミュニティーの一員にはなれないし、組合派の信徒は福音派の宗教コミュニティーに入ることには出来ない。これを見ても、コミュニティーは、「すべて国民は、個人として尊重される」（憲法十三条）といった社会型の原則に基づく集団と区別されるのである。

なるほど、人類全体を一つの「コミュニティー」と位置づけることも可能であるに違いない。しかしながら、この場合でも、コミュニティーの基本定義そのものは、何ら変更を余儀なくされるものではない。つまり、人類コミュニティーという発想は、人類という集団への「共属感情」に立脚するものだからである。敢えて乱暴に言ってしまうえば、世界は一家、人類は兄弟といった考え方だと言えよう。そこにあるのは、赤の他人との連帯という思想ではなく、みんな仲間なので助け合おうという発想に他ならない。

● 「コミュニティー」の根っこは「市町村の～」

語源を探ると、英語の「community」やフランス語の「communauté」などの西洋語は、ラテン語の「communitas」という共通根に辿り着く。そして、この「communitas」は、同じくラテン語の「munus」から派生した単語である。

よく見れば察しがつく通り、英語やフランス語の「municipal (=市町村の)」の元になった「municipalis」というラテン語も、この「munus」から派生したものだ。つまり、「コミュニティー」という語は、「municipal (=市町村の)」と非常に近い単語なのである。事実、英語やフランス語の「municipal」をドイツ語に訳すと、「kommunal」となる。

だから、英語やフランス語を母語とする人々ならば、「community (英)」や「communauté (英)」の語幹部が、「municipal」の「muni…」と同源だということ、ほとんど感覚的に了解できるだろう。おそらく、「コミュニティー」と「コミュニケーション」との類縁性などは、さらに容易に体感できるに違いない。ついでに言えば、報酬を意味する「remuneration (英)」や「rémunération (仏)」の語幹部もまた、その起源はラテン語の「munus」なのだ。一方、日本語を母語とする我々には、このような相互関係を実感することが非常に難しい。一つ一つの単語は、全体的な語彙体系の中に置かれてこそ、その意味が確定されるからである。日本語は、新たに翻訳語を作ったり、それが難しい場合はカタカナ語で表記したりという形で、舶来用語を取り込んで来た。これでは、各語を全体的な語彙体系の中で理解することは出来ない。

話を戻そう。ラテン語の「munus」は、「贈物、賦課、任務、職、義務、成果、好意、祝祭時の演出」といった意味を持つ。これに、「相互の、共同の、共通の」などを意味する接頭辞の「co-」が付くと、「communitas」というラテン語の大枠が形作られる。先述の通り、これが「community (英)」や「communauté (仏)」の直接的な語源で、その意味を考えると、相互の贈物、共通の賦課、共同の任務や職、相互の義務、共同の成果、相互の好意といったところになるだろう。なお、文化人類学者のV.ターナーが使用した「コミュニタス (communitas)」は、特殊な学術用語なので、ここでは取り扱わないことにする。

●ソサエティーの根っこは「戦友」

ともあれ、日本語を母語とする者を含め、おそらく世界中の多くの人々にとって、「コミュニティー」という西洋語を理解することは、それほど大きな困難ではないだろう。ヨーロッパでもアジアでもアメリカでも、コミュニティー型の人間関係は、大なり小なり実際に存在するからである。先出の『広辞苑』を見ても、日本語と化したカタカナ語の「コミュニティー」は、かなりの的確に原

語の意味を反映していた。これに対して、「社会（ソサエティー）」という語は、西洋近代型の人間関係を土台としている分だけ、非西洋文化圏に生きる者には、その意味を理解するのが難しい。敢えて大雑把に言えば、仲間や同類との協力なら直感的に分かり易いが、赤の他人との連帯という考え方は、かなり理屈っぽいのである。

例えば、『広辞苑』による「社会」の項目は以下に示すとおりだが、誰がどう見ても「コミュニティー」の場合に比べて非常に分かりにくい。なお、『広辞苑』の「ソサエティー」の項目には、社会、社交界、協会、学会、団体といった訳語が並んでいるだけである。

- ①人間が集まって共同生活を営む際に、人々の関係の総体が一つの輪郭をもって現れる場合の、その集団。諸集団の総和から成る包括的複合体をいう。自然的に発生したものと、利害・目的などに基づいて人為的に作られたものがある。家族・村落・ギルド・教会・会社・政党・階級・国家などが主要な形態。「一に貢献する」
- ②同類の仲間。「文筆家の一の常識」
- ③世の中。世間。家庭や学校に対して利害関心によって結びつく社会をいう。「一に出る」
- ④社会科の略。

上の記述は、ただ難解なだけではない。説明自体が自家撞着しているし、相互に不整合をきたしているのである。例えば、「社会」という語を説明するのに、「利害関心によって結びつく社会」と言われても、ほとんど説明になっていないだろう。さらに、①では「家族」を社会の例に挙げているのに、③では「家庭」が社会に対立する例となっているのだ。もちろん、『広辞苑』が悪いのではない。国語辞典の使命は、日本語の中で用いられる「社会」という語を説明することであって、その本質規定を行うことではないからである。むしろ、『広辞苑』による説明が抱える矛盾こそ、日本語の宿命を体現しているのだと言えよう。要するに、「社会」という日本語単語は、意味が曖昧なまま用いられ続けており、「ソサエティー」を「社会」と和訳したところで、その内容が日本語で正確に伝わるわけではないということなのである。

日本語を母語とする我々は、少なくとも伝統的に見れば、連帯や協力を進めることを、仲間づくりと同列視する傾向を持っているように思えてならない。この同列視は、コミュニティーとソサエティーの同列視と紙一重だ。すなわち、

コミュニティー（共同体）＝協力関係＝仲間の集まり＝連帯の場＝社会（ソサエティー）…という次第である。たしかに、英語の「ソサエティー」やフランス語の「ソシエテ」などの諸単語が今日的な意味を獲得したのは、それほど古いことではない。しかし、これらの単語は、当初から、村落や家族といった自然発生型の集団とは異なった意味を担っていた。すなわち、「社会（ソサエティー）」の構成原理は、理屈抜きの共属感情ではないのである。

語源を探ると、英語の「society（英）」やフランス語の「société（仏）」やポルトガル語の「sociedade」などの西洋語は、ラテン語の「societas」という共通根に辿り着く。さらに、この「societas」は、同じくラテン語の「socius」から派生したものである。後者の「socius」は、同僚や相棒や会員などを意味し、元来は戦友を指していた。そして、そこから派生した「societas」は、「結合、同盟、結社、団体、組合、修道会、商人会」などの意味を持つようになった。これらは、家族や村落とは異なり、どれも何らかの制度的枠組や機能的要件の上に成立するものだと言えるだろう。英語の「society」やフランス語の「société」といった西洋語は、この延長線上にある。もちろん、それらの西洋語自体も、時代に伴う意味の変遷を免れるわけではない。

一六世紀から一七世紀にかけて、「society（英）」や「société（仏）」といった語は、永続的な集団組織、具体的には宗教団体や業界団体などを意味するようになる。その先駆的な事例の一つは、一五三四年にパリで創設されたイエズス会（Society of Jesus/Société de Jésus）であろう。ただし、その正式名称は、ラテン語の「Societas Iesu」であった。周知の通り、日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、同会の創設者の一人である。

その後、「社会（society/société）」という語は、学者の世界や社交界をも指すようになり、ようやく一九世紀に入ってから、ほぼ今日と同様の意味を獲得したのである。言うまでもなく、その背後には、市民革命や産業革命、さらには国民国家の形成といった歴史的な出来事があった。大雑把に言えば、人々は市民革命によって身分的な束縛を解かれ、産業革命によって土地と直結した農村型の生活から離脱し始め、近代化と民主化が進む中で、国民国家に個人として所属する人間となってゆくのである。

●社会学が学問として独立したのは 19 世紀末

社会学という学問分野もまた、この過程で誕生した。一八三九年、フランスの哲学者オーギュスト・コントが、その著書『実証哲学講義 第四卷』の中で、初めて「社会学 (sociologie)」という語を活字にしたのである。要するに、「社会学 (ソシオロジー)」という学問名称は、コントによる新造語なのだ。もう少し細かく言うと、「ソシオロジー (社会学)」という新語は、ラテン語の「socius」と、理法や学知などを表すギリシャ語の「logos (λόγος)」との組み合わせを元にして生み出されたものである。ただし、社会学という用語が誕生したことは、それが固有の学問分野として確立されたことと同じではない。コント自身にしても、基本的には哲学者であって、社会学者 (sociologue) とは呼ばれていなかったのである。

社会学が独立した学問分野としての輪郭を整えたのは、早く見積もっても一九世紀の末頃のことであった。やがて、この学問の発展と多様化に連れて、「society (英)」や「société (仏)」といった語も意味を広げてゆく。だが、ここでは、専門用語ではなく、あくまでも一般語としての「社会」を取り扱うことにしよう。

●ソサエティーとコミュニティーの区別が曖昧になった原因

ともあれ、日本では、幕末から明治期にかけて、近代的な西洋文明が輸入される中で、「society」や「société」といった西洋語も紹介されるようになる。だが、当時、これらの語に対応する日本語は存在しなかった。例えば——柳父章『翻訳語成立事情』——によると、福澤諭吉が一八六八（慶応四年）に『西洋事情 外編』刊行した際、「society」に「人間交際」という訳語を宛てていたということである。この訳語は、ラテン語の「societas」に照らした場合、非常に的確だと言えよう。おそらく、福澤の慧眼は、この語の本質を見極めていたに違いない。しかしながら、「個人」という訳語が存在しなかった時代の日本において、「ソサエティー」をどう和訳したところで、その語義を正確に伝えることは不可能であった。

英語の「society」に「社会」という訳語を最初に宛てたのは、明治初期に新聞記者として活躍した福地源一郎（櫻癡）だというのが定説だ。具体的には、一八七五（明治八）年一月一四日付の『東京日日新聞』に中で、「社会」という語に「ソサイチー」とルビを打ったということである。ただし、それで「society

＝ソサイチー」の意味が多くの読者に理解されたわけではあるまい。むしろ、敢えて漢字を用いたことで、「ソサイチー」に対する誤った解釈を生む危険性さえあったのではないだろうか。と言うのは、漢語の世界には、ずっと以前から「社会」という語が存在していたからである。もちろん、漢語の「社会」は、ソサエティーの翻訳語である「社会」と同じ意味ではない。

実際、『全訳 漢字海〔第三版〕』（三省堂）によると、一二世紀に孟元老が誌した『東京夢華録（とうけいむかろく）』に「社会」という語が既に登場しており、その意味は、「社日に行う村人の会合。氏神を中心とした二十五戸一単位の集まり。のちに、節目に行う演芸集会」だということである。これは、極めて重大な事実だ。漢語の「社会」は、明らかに、「ソサエティー」よりも「コミュニティー（共同体）」に近いのである。さらに、佐藤亨『幕末・明治初期漢語辞典』（明治書院）を見ても、明朝期の中国で編纂され、江戸期には日本にも紹介された『世説新語補』に登場する「社会」を、「郷村の人民が相互の向上のために作った仲間の意味」と定義しているのだ。なお、同書によると、「英語 society に『社会』を宛てた最初の例」は、一八五六年に清朝期の中国で刊行された『地球説略』だとのことである。

いずれにせよ、福地源一郎は、「society」の訳語に、「コミュニティー」的な意味を持つ漢語の「社会」を宛てたのだ。もちろん、それは責められるべきことではない。当時の状況では、たとえ誰であろうと、他に適切な訳語を見つけることが不可能であったに違いない。さらに言えば、明治初期の日本では、独立した個人を構成単位とし、赤の他人との連帯を旨とする集団という発想自体が、ほとんど理解不能であったと思われるのである。

それでも、「society＝ソサイチー」の訳語に漢語の「社会」が宛てられたことで、ソサエティーとコミュニティーの区別が曖昧になったことは事実であろう。そして、漢語から借りた「社会」という単語は、結果的に、「society」や「société」の訳語として、日本語の中に定着してゆく。今日では、この語が「society」や「société」の訳語であることさえ意識されずに用いられる場合も多い。例えば、「社会人」や「(新聞の) 社会面」や「社会の窓」といった表現は、ごく一般的な日常語である一方、西洋語の「society」や「société」と無関係であるばかりか、漢語の「社会」からも隔たっているのだ。かくして、日本語の「社会」は、西洋語の翻訳であり、中国経由の漢語であり、かつ一般的な日常語という性格を、矛盾を抱えながら同居させてゆくのである。先出の

『広辞苑』による説明は、まさに、日本語の宿命に由来する矛盾を体現しているのだと言えよう。